

ディスカッション 「21世紀の社会システムと森の役割」

藁谷 今日には二つのテーマがあります。一つは「20世紀と21世紀の社会システムは根本的にどこが違うのか」。そして二つ目は「21世紀の社会システムと森の役割とは」です。

まずは内藤さんと北川さんの自己紹介からお願いしたいと思います。
 内藤 京都大学で環境システム工学を専攻しています内藤です。よく言われるように、行政、また大学も縦割りで、それぞれの分野で狭く深く専門化するということがあります。この効率化によって今の社会が作られてきたわけですが、私はそのことのツケが今、環境・地球に溜ってしまっていると認識しています。もう一度それを横に広くつなぎ、そこで見えてくるのは何なのか、ということテーマにしております。

北川 三重県知事の北川です。赤池さんとはだいぶ長くおつきあいただいており、数年前にアメリカ視察にご一緒したこともあります。つまり、赤池哲学を行政の現場で実践しているというふうにご理解いただければと思います。不肖の弟子ではありますが、できるだけ彼の考え方に追いつこうと努力しています。

■ 「21世紀の社会システム」とは

藁谷 では早速、第一のテーマに移りましょう。まず、21世紀の社会システムは今までの社会とどう違うのか。最初に内藤さんにずばりお聞きしましょう。

内藤 「20世紀から21世紀へ」「持続可能な社会」という言葉が今あちこちで飛び交っています。「持続可能な社会」という言葉の裏には、「持続不可能な状況」に到っているという認識があります。人類全体が危機的状況にあり、しかもそれはそれほど先ではないという考え方です。私もそれを信じている一人ですが、ではこの危機をどうやって切り抜け、次の社会を作るかということを考えなければなりません。そのためには、まず「なぜそんな社会になってしまったのか」が問題となります。それを知らないことには、本当の処方箋は書けません。

いったい20世紀は何が問題だったのか。いろいろな人がいろいろな言い方をします。技術が少し間違っていたのではないか。大量生産・大量消費の社会の仕組みそのものが問題だったのではないか。さらには、それらを作り出した裏にある近代工業文明の考え方に問題があったのではないかという人も、最近多くなってきました。一言で言えば「資源と環境は無限であるという世界観」に行き着く。これは我々20世紀人の頭の中に抜きがたくあります。資源と環境は力のある人がうまく使って、豊かになればそれでいい、という前提があり、その結果がグローバルな市場経済、近代の大量生産技術につながり、今の問題の大半を作ってきたわけです。

これからの21世紀がどうなるのかを一言でいえば、「無限の世界観」を「閉ざされた地球の中で生きる有限の世界観」に変えないといけません。地球は有限の閉ざされた世界であり、生態系である。この認識の中でどう新しい社会を模索していくのかということだと思います。

私は工学屋ですが、ずっと以前から「工業から農業へ」ということを言っています。と言っても別に工業を否定するわけではなく、工業と農業のバランスをもう一度とり戻そう、ということです。地球は閉ざされていて、唯一地球外でつながっているのはお天道様しかありません。結局はお天道様の恵みに力を借りて生きていくしかない。これはもう物理の大原則です。ですから、結論的にはお天道様によって生かされている「生き物」、例えば「バイオマス」です。結局、森に繋がってくるわけです。では、森のおこぼれに預かっていく工業とは何なのか。それが21世

内藤 正明
 (京都大学教授・工学博士/社の会常任委員)



1939年、大阪府生まれ。京都大学工学部卒業。京都大学工学部助教授を経て74年、国立公害研究所入所。90年には改組された国立環境研究所地域環境研究グループ統括研究官となる。この間、筑波大学環境科学研究科教授を併任。95年、京都大学大学院工学研究科環境地球工学専攻教授。専門分野は環境システム工学。兵庫県「森のゼロエミッション」基本構想策定検討委員会委員長。「エコトピア」(日刊工業新聞社)ほか編・著書多数。

赤池 学
 (ユニバーサルデザイン総合研究所所長)

司会・進行/藁谷 豊
 (エコのもりセミナー事務局)

技術と社会変革のキーワード

技術と都市	20世紀	21世紀
技術	規格/大量生産 ・ 効率効率 ・ 資源枯渇 ・ 世界共通 ・ 工業的生産	適量/多様生産 ・ 資源効率 ・ 再生性資源 ・ 地域固有 ・ 工業的生産
	消費社会 ・ 供給側主導 ・ 使い捨て ・ 物の所有消費	市民社会 ・ 利用側主導 ・ 高品質長寿命 ・ サービスの利用/レンタル
	一過の廃棄 ・ 非再生的 ・ 非分解的	循環・再生 ・ 再生的 ・ 自然還元的
都市	大規模工業化 大都市化 広域連携	農工バランス 都市と農村の融合 地域自立

紀の社会システムを考える上での大きなポイントでしょう。

藁谷 北川さん、同じ質問です。「21世紀の社会システム」とは何でしょう
うか。

北川 それには多面的なことがあると思いますが、環境という形でお話
できればと思います。

我が国では1970年に公害国会が行われ、14本の法律が成立しました。その時、三重県は四日市公害を抱えていたのですが、総量規制や煙の規制など14本の法律が国会を通して、実行に移されました。結局四日市市は公害を克服し、UNEP(国連環境計画)のグローバル500という権威のある賞もいただきました。そして、1993年には環境基本法ができました。これは生産から大量廃棄に至るまでのワンウェイではなく、循環型社会、環境サステナブルな社会を作ろうという大転換だったと思います。その翌年に環境基本計画ができました。昨年はちょうど1970年の公害国会から30年で、循環型社会形成推進基本法が成立し、6本のリサイクル関係の法律が通過しました。その思想は「環境対応」ではなく「環境保全」です。悪いものが出てくるから対応して規制を加えよう、という考えから、出てくるものはできるだけ少なくしよう、あるいは資源化しようというようにパラダイムが変わったわけです。従って日本社会は大量生産から大量廃棄に至るワンウェイの社会・経済・政治体制から、一気に循環型へと移っていくと私は思います。例えば通産省のやっているエコタウン構想があります。先日、OA機器のリサイクル工場を見てきました。動脈産業はワンラインでできあがるのですが、静脈産業は入口から出口まで見事に全部手作業。未成熟社会の典型をそこにみたような気がしました。

循環型社会の形成が国策となり、私ども県行政を預かる者も、全力を挙げてそれに取り組みたいと思っています。昨年、三重県は「環境に優しい買い物をしよう」という活動で、「グリーン購入大賞」をいただきました。その時、一番ネックになったのはバージンパルプのほうが安く、再生紙のほうが高いことでした。私どもは税金という公金を先銭で払っていただくという珍しい事業体です。今までのワンウェイ思想でいくならば、先にお金をいただくわけですからできるだけ安いものを買うのが鉄則で、バージンパルプを買ったほうがよい。でも、環境先進県を作るという視点で見れば、リサイクルの再生紙を買ったほうがよい。経済論理を優先して安いバージンパルプの紙を買うか、あるいは環境に配慮して高い再生紙を買うか、という二律背反にぶつかるわけです。そこでずいぶん議論をしまして、じゃあ再生紙を安くすればいいじゃないか、そういうシステムを作ればいいじゃないか、という話になりました。三重県庁だけで賄えなかったら、市役所や例えばJAさんのような大きな組織と一緒にやればいい。そのようにして単価をバージンパルプに合わせていきながら、グリーン購入に取り組んできました。

私たちは「環境対応」を1970年にスタートし、「環境保全」を2000年にスタートしました。今度は「環境経営」だと思います。つまり、バージンパルプよりも再生紙のほうが安いという社会・政治・経済体制を作り上げることです。今はワンラインで自動車ができますが、これからはワンラインで自動車が全部分解される社会を作らないといけない。そのような社会を作り上げることをすべての製造会社がミッションとして持たなければいけないし、私たちの意識もそこへ行かなければいけない。そうでなければとてもサステナブルな社会は作れないのではないのでしょうか。

環境保全が人類にとっていいかどうかというのは、非常に浅いエコロ

北川 正恭 (三重県知事)



1944年、三重県生まれ。早稲田大学第一商学部卒業。72年、28歳で三重県議会議員に当選(以降三期連続)。83年衆議院議員に転じ当選4回(この間、文部政務次官などを歴任)。95年、三重県知事に就任(99年再選)し現在に至る。「生活者起点の県政」を目標に掲げ、「三重を元気にする」ため積極的に活動中。囲碁6段、日本拳法8段と文武両道を地で行く行動派。

三重県

環境と経済を同軸に捉えた環境先進県づくり

20世紀が、環境への配慮よりも産業活動を優先させる社会構造であったのに対して、これから始まる21世紀は「環境の世紀」として、環境への負荷が少ない持続的な発展が可能な「循環型社会」を目指していく必要があります。

こうした時代において、環境に配慮しているのは経済は成り立たないという従来の考え方から、環境と経済を同軸に捉え、環境に配慮した方が経済的にも有利になる。環境に配慮しない企業活動は持続し得ないということを明確に打ち出していく必要があると考えています。

21世紀において、企業活動により保全・創出された環境の中であらゆる主体が恩恵を享受することができる社会であるためには、企業活動の方向を、単なる利益への対応から、より少ない資源で、より環境負荷が少なく、より公平な資源配分のループを描くような活動に変えていくため、行政としてもこうした環境効率性の高い経営を支援していく必要があると考えます。

こうしたことを通じて、これまでの「大量生産、大量消費、大量廃棄」型の経済から循環を基調とした「資源生産、資源消費、資源ゼロ」型の経済へのパラダイムシフトを図ることができると考えます。

このような時代認識の下、国においても世界的な流れを踏まえ、これまでの一方通行の社会から循環型社会の構築に向けて大きく転換するため、本年の通常国会において、循環型社会形成推進基本法をはじめとして廃棄物処理法の一部改正法や各種リサイクル関連法などあわせて6本の法案が成立しました。

これは、国としても従来の公害対策型の環境政策を抜本的に転換する決意を表明したものと理解できます。

こうした動きを踏まえ、「環境先進県づくり」を標榜する本県としても、県民・企業・行政の協働と連携が大切であると考え、環境経営運動の促進をはじめ、企業との協働・連携を促すネットワークの構築や県内の市町村との協働・連携を促す場を設けるなどの取組を行っています。制度面においても、現在公害防止条例を改正し、広く生活環境全般の課題の解決に資する新たな条例の制定に取り組んでいます。

1

ジーです。これからは人類がおごりを捨てて、鉱物まで含め生物全体と一緒に共存できるという「ディープエコロジー」が必要なのではないでしょうか。十年ほど私はそれを言ってきたのですが、十年前はそれを言うとても私自身が生存できないような状態だった(笑)。最近はだんだんとそんな話ができるような状況になってきたという感じがしています。相対的にこそ種の保存はあるわけだから、人類は謙虚にならないと本当に滅びるのではないかと心配しています。ですから、すべての生物が生存可能な、全体最適の社会システムをもう一回作り直し、環境も含めた文化に貢献する政治・経済・社会システムを作らなければ、日本はOECD加盟国の中からも尊敬されないでしょう。そのシステムを作ることが21世紀私たちに与えられた使命かと感じています。

■第一次から第三次産業まで貫く循環型社会

藁谷 お二人に共通のキーワードに「循環型社会」がありました。赤池さんの話にもありましたが、循環型社会は工業の中、つまり第二次産業の中ではよく言われるのですが、第一次から第三次産業を通してはなかなか言われません。ですが、それが達成されて初めて、今北川さんが言ったような全体の社会が見えてくるのではないのでしょうか。このあたりを専門家である内藤さんからお聞きして、後に赤池さんの意見を聞きたいと思います。

内藤 一次、二次、工業、農業、森も含めて循環が体系化されなければいけないというのは、私も言葉としてはわかります。実はトヨタ自動車が90何%も再利用していると聞いて、大変驚いたのですが、一般には工業系は「微生物が分解して植物が利用して」という世界ではなく、相当人工的な努力とエネルギーを注ぎ込んでいます。ですから、工業系の静脈は本気で取り組まないとかなりしんどい。私は個人的には有機物を対象にしている、これは基本的には自然の循環に任せておけばいいのですが、実はそう簡単でもありません。循環したものは何でも値段が高くなってしまいます。

「トヨタの森」に最初に関わった時、「なぜ、日本の木はうまく循環利用されないか」という議論をしました。外国から安いものが怒涛のごとく入ってくる中で、循環した高いものを本当にマーケットの中で使ってもらうにはどうしたらいいか、ということです。これは国際貿易の大きな仕組みの中で起こっていることですから、為替レートでも変わればすぐに変わりますが、日本は経済がくたびれたとは言ってもまだまだ強いわけで、これが循環にとっては非常にしんどい。それが一つです。

それから、少なくとも都市と農村の機能が一体化しないと、有機物の循環ひとつとってもほとんど不可能です。生ごみは都会で大量に出ますが、持っていく先は当然農地・林地ということになります。エネルギーとお金をかけて延々と運んでいくということでは、とても循環なんて起こりえない。そういう意味では、有機的につながったコンパクトな形での都市と農村の形態を考えなければなりません。都市のデザインを一から考え直さないと循環は難しいという、深みにはまってきたのです。結局、都市構造や産業構造全体の大きな変革を巻き起こさなければいけません。

赤池 基調講演でも、三重県の有機農家と食品加工メーカーが関わり、それをテーマパークで産業化するという話をさせていただきました。同じことがトヨタ自動車のような企業にも言えると思います。トヨタの森の事業は、二次産業が始めたまさに一次産業的な、非常にチャレンジングな取り組みだと評価しています。もちろん、燃料電池自動車の開発



を含め、二次産業者としてもきっちりした仕事をしていらっしゃいます。三次産業という点では、今アメリカでトヨタ自動車のカンバン方式が教えられています。重要なのは、自動車の部品メーカーだけでなく、オモチャ屋さんやお菓子屋さんに対してもノウハウを指導していることです。現在は無償でやっているわけですが、私はこれを第三次的な教育産業と捉えることもできるのではないかと考えています。また、三次産業者であるという意識を持って、例えば中国の若い人たちにトヨタが持っている自動車交通に関わる技術や具体的な熟練技能を教育していくというような取り組みも、今後は求められてくると思います。循環型社会をきちんと回していくためには、一次、二次、三次産業を貫く「知恵」、すなわち「人材」の循環を考えていくことが重要なポイントになってくるわけです。

それから、先ほどNPOの話させていただいたのは、これからの社会システムやモノづくりには市民も積極的に関わる必要があるからです。21世紀に求められる千年持続型の社会システムの実現は、企業と中央官庁、地方自治体、研究者、そして市民とがまさに循環しあうような、「知恵の輪の流通システム」をつくることだと思います。そのためには、この日本という国の社会形態自体がどのように変わってきたのかを振り返ってみたいと思います。まず大和朝廷ができて中央官庁主導型の社会システムができました。それが藤原氏の頃になると、中央のことばかりを考えて地方行政を無視する。すると地方自治体が台頭してきて戦国時代になる。戦国時代そのものは大企業主導型の社会システムだったはず。江戸時代は中央官庁主導型でした。そして、文化文政の時代くらいから市民のエネルギーが徐々に台頭してくるけれども、薩摩と長州によってまたそれが中央官庁主導型の社会システムに戻される。20世紀の後半は大企業が中心となって社会システムを作ってきました。要するにまた同じことをやり直せばいいのではないのでしょうか。江戸の初期や後期に華やかな文化や生活者重視社会を築きかけたように、もう一度市民パワーを発揮し、市民自らがいろいろな社会システムづくりに正々堂々と参画していく。それも市民だけがやるのではなく、良質な行政や地域の大学や学校の先生方と「ワーキング・トゥギャザー」する形で参画していくことが、循環型社会を作っていく上での基本姿勢だと思います。

■地域から始まるパラダイムシフト

藁谷 内藤さんと赤池さんにたくさんのお話を話していただきましたので、ここで一度キーワードを整理しましょう。一つは一次、二次、三次を貫く循環型社会は「地域」にあるということ。それも都市と農村が結びつくような新しい形でなければならない。なおかつ、それは単にモノの循環の循環型社会ではなく、人間、そして知恵の循環も共になくてはならない。赤池さんが「生命地域主義」という言葉を基調講演で使いましたが、その概念はおそらくこういうことなのだろうと私は理解しました。

今日のお話を聞いていると、エネルギー自給や食糧の問題もあまり大きな単位で考えずに小さな単位で考えていったほうが良いと思いました。そして、地域の企業・行政・市民がみんな知恵を回していく。三重県ではまさしくそうした活動が始まっていると思います。北川さん、そうした事例について話していただけませんか。

北川 私の時代認識では、今回のパラダイムシフトは明治維新や戦後改革とは比較にならない、人類始まって以来の大革命だと思います。ゲノムの世界での生命倫理の変化。クローン人間ができることを前提にして

どう考えるか。あるいは国境を前提にナショナリズムが出てきたのですが、今や国境など簡単にリアルタイムに、インタラクティブに壊してしまえるハードなマシンがあるように、従来の憲法とか法律とか、もうそんなことを言っている時代ではないわけです。内藤さんがおっしゃったように、「地球は無限」という前提での憲法や法律です。このように考えていくと、20世紀当然そうだと思い込んできたパラダイムを、一度全部壊さなければならないと思います。

私は三重県庁で「ごみを減らそう」という運動を始めました。私は、ごみ箱はいらんんじゃないか、いっそ全部なくしてはどうかと言ったのですが、そうしたら、立派な部長から反発を食らいました。週に一回は部下に整理整頓を言っている、その上何を知事は言うのか、というわけです。そんな部長はもういらんと思いましたがね(笑)。抜本的に変えようという思いに全く至っていないわけですから。まるで1970年頃の対応です。私が言いたかったのは「ごみを作らない」ということ。出るごみはできるだけ少なく、あるいはリユースする。だから「ごみ箱はいらん」という発想です。パラダイムシフトを起こすことが大事だったわけです。実際、三重県庁からごみ箱はなくなりました。

今行政の関心はどういうことかという、「予算をいくら取ってきたか」。取ってくれば「なかなかいい知事だ」と、こうなるわけです。こんなばかげた発想はどうぞもうやめていただきたい。予算の多寡で価値を計るのは20世紀の社会です。今世紀はその予算がどれほどの行政価値を生んだか、どれほどの県民満足度を生んだか、で価値を計らなければいけない。

三重県の評価システムについてお話しします。私たちは、一つひとつの事業計画を全部費用対効果から分析し、実施したものについてはすべて評価し、その評価を県民にお見せして、県民サービスにつながったものだけを再度実施するようにしています。どんな実力者が言ってきたも、費用対効果が悪ければそれは断固やめる。こういうシステムを入れたことが、三重県行政が回転し始めた一番元にあります。これからは行政の体質を民間の常識にだんだん近づけていかないといけない。そのための努力を私たちはこれからも続けていきます。県民から見放された団体は減びます。そういう危機感を持って県政にあたらせていただいております。

藁谷 今日北川さんに来ていただいたのは、そのお話を聞きたいのが大きな理由の一つでした。パラダイムチェンジとよく言われますが、それには大きなパラダイムチェンジだけでなく、日常の延長のパラダイムチェンジもたくさんあると思います。三重県が取り組んでいる「事務事業評価」は今ご説明いただいた通りですが、私が注目しているのは内部評価、つまり自分たちの事業をどう自分たちで評価していくかということです。そのシステムは企業でも行政でも、またNPOでもあまり変わるものではありません。それぞれがきちんと内部評価して次のステップに進んでいくこと。それもパラダイムチェンジではないかと思えます。

もう一つ北川さんに聞きたいのですが。市民による事業評価が進んでいるようですが、そのお話を少ししていただけませんか。

北川 内部の評価システムは基本的には内々の評価です。以前はそれさえもなかったのですけどね。行政体というのは予算主義です。一億円の予算をいただくために東京に何度も通って、徹夜で予算書を作り、中央官僚の「てにをは」を直せというばかげた指示通りに何度も書き直して……。それはもう命がけです。その結果ついた一億円の予算がはたしてどのように使われたのかという見直しは、寝ぼけた頃にやる。決算は2

三重県の取り組み

品名	数量	単価	総額
...
...
...

リサイクルフォルダ事例



リサイクルセンター



大型シュレッダー室



分別ボックス

年遅れですから。また、予算は使い切らなければならないということで、空出張や官官接待の文化がありました。私はそれを決算主義に変えるべきだと思いました。評価をして一億円の予算がどのように県民の満足度につながったかを見るべきだろう、と。三重県では内部評価表をインターネットに載せてみなさんに見てもらっています。国民の方すべてがオンブズマンです。これを市民団体、NPOの方に一緒に作って下さいとお願いしましたら、やはりすごいですね。この事業のここは優れているが、ここは全然だめだとか、グラフにしてわかりやすく作られている。やはり市民の知恵が入らなければだめだと思いました。今は段々と内部評価から外部評価へと移しています。すべてオープンにしたほうがずっといいと思いますので。国もきっとそうなるでしょう。変わるのは時間の問題だと思います。

藁谷 素晴らしいシステムだと思いますが、県の職員の方に戸惑いはなかったのですか。

北川 それはたくさんあったでしょう。長野県の今の状態を見ていただければだいたいわかるはずですよ（笑）。

藁谷 それでも今はみなさんきちんとやっていらっしゃる？

北川 いえいえ、毎日喧嘩ですよ（笑）。

テレビを見ていましたら、マスコミの方の「今度の知事は変わって大変ですね」との問いに、長野県庁の方が「よくご説明申し上げて、ご理解いただきたいと思う」と答えていまして、これは全然わかっていないなと思いました。「我々のやってきたことは絶対に間違いがないから、今度の知事にも説明して理解を求めよう」。これは傲慢以外の何物でもありません。県民の下した民主主義の審判に従って新しい田中知事に教を請い、そのように改めますといった時に初めて長野県庁は変わります。従来の管理型・予算消化型の行政は、情報公開時代にはまったく成り立ちません。そのことを十分に理解した上で政策立案・遂行し、なおかつ自己責任も取るという行政体にならないといけないのだと思います。

藁谷 ありがとうございます。大きなパラダイムチェンジと小さなパラダイムチェンジ。実は小さなパラダイムチェンジがとても大事なのだということに気づかされました。

「エコのもりセミナー」の活動も、小さなパラダイムチェンジだったと思います。そこで取り組んできたのは「教育」、つまり人材育成です。里の緑の再生を自分たちの力で行えるような人づくり。従来はその教育の部分は「公的セクター」やNPOのような「共的セクター」が担うものでしたが、そこにトヨタ自動車のような企業という「私的セクター」がチャレンジしたこと自体、小さなパラダイムチェンジだったと思うわけです。

■ 21世紀の社会システムと森の役割

藁谷 次に二つ目のテーマ「21世紀の社会システムと森の役割」です。内藤さんに作っていただいた資料に「里地・里山の多様な価値」があります。この図の説明から始めていただきましょうか。

内藤 「里地・里山の多様な価値」は、わかりやすく大きな三つの柱に整理したものです。従来の経済的な価値に対して、それ以外の価値をどう重視していくか。どのようにその価値を拾い上げて認識していくか。それは森に限らず、あらゆるところで言われていることです。それを整理するために「エコノミー」「エコロジー」「エッセティック」の3つの柱を考えました。「CO₂吸収源としての森林」の価値など、一昔前は考えられなかったことです。今やCO₂の吸収源はマーケットでも取り引きされる。みなさんも木を植えたら、その権利を売れるような時代が目の前に

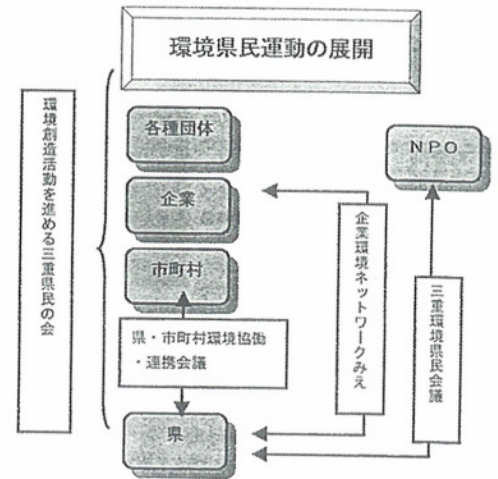


表-3 里地・里山の多様な価値

経済的 (エコノミー) 価値

- ・ 食糧危機に対する農生産の場
- ・ 地域資源の宝庫
- ・ ローカル技術、適正技術の宝庫
- ・ 自然エネルギー生成の場

環境保全 (エコロジー) 機能

- ・ CO₂吸収源としての森林
- ・ 物質循環の場
- ・ 生物多様性の保持
- ・ 水質浄化、保水
- ・ 大気浄化

審美的 (エッセティック) 機能

- ・ 里地景観
- ・ 農体験による老人セラピー
- ・ 農体験による子供の心のケア
- ・ コミュニティー再生
- ・ 日本文化の原点
- ・ 生命との共生

来ているということです。まあ、よほど広く植えないとだめですけどね。そうしたことも含めてこれまではちょっと考えられないような価値が出てきているわけです。

さらに最近では「高齢者のセラピー」「子どもの心のケア」「教育」「文化」、また「生命」「倫理」「宗教」「哲学」としての価値も見直されています。里山など、これまで価値を低く見られていたものをもう一度再評価した、本気の地域社会づくりがあちこちで起こってきています。

私自身少し関わっている計画なのですが、広大な林地の中で最初は従来型の住宅団地を作る考えでいたようですが、この時代にそんな開発はないだろう、思い切って持続可能な社会を実現して、世界のモデルになるようなまちづくりをしよう、ということになりました。その問いかけから始まり、検討会では様々な議論がなされました。「地域で自立的にやっていける森を活かした持続型の町」という大きな考え方の下、資源やエネルギーなどもなるべく中で完結型にしていこう。仕事、情報といった面も、遠くに車で通わなくても地域の中で何とかできるようなまちにできないだろうか。新しいこれからの地球時代のライフスタイルをその中でどう実現できるのか。いろいろな先進事例を集めて地域にふさわしい町を作り、日本中から見に来てもらえるようにしたいと考えられています。アメリカに「ヴィレッジホームズ」というコミュニティがありまして、これは「アワニー」の原則をベースに、経済の価値と地域の審美的な価値、エコロジカルな価値の三つをいかにバランスをとって、住む人たちにとってよりよい町にするかを、本当に真剣に考えて作られています。ですから、作った時の10倍ぐらいの価格で取り引きされるところもある。最初は財政的にしんどいかもしれませんが、思い切ってやってみればひょっとしたら将来10倍ぐらいの価値で取り引きされるようなことになるかもしれません。副知事さんが視察されたモデルはヨーロッパの自立型の村落です。一つひとつ個性を持った多様な町がいくつも点在していて、基本的にはそれぞれが自立している。そんな町を10ほども作りたい。そんな思い切った計画です。

赤池 内部監査の話が北川さんから出ましたが、やはりベースは人間の内部の「精神」や「身体」で監査するということでしょう。実は私もバブル時代には今の研究所よりももっと大きな会社を経営してまして、億ションを作ったり、会社のCIなどで儲けていました。土日も家に帰れないという暮らしを続けていたのですが、その結果妻の末期ガンに気づけず、病気がわかった半年後に死なれてしまいました。さらにその前に新築住宅を建てていたのですが、そこで生まれて育った子どもが重度のぜんそくとアトピーになってしまった。私がシックハウスの取材活動を始めた契機はうちの子どもの健康被害だったのです。環境の問題や循環型社会の原点は何かというと、私たちの当たり前の内部身体監査で、良質な食べ物をちゃんと食べようよ、良質な家がきちんと手に入る仕組みを作ろうよ、というすべてこれに尽きるのではないかと思います。私たち生活者が良質な食べ物を真剣に欲していき、良質な健康住宅を真剣に欲していけば、結果として環境問題の大半は解決するのではないのでしょうか。今大事なのは、何か新しい別のものをというイノベーションの欲望ではなく、私たちの当たり前のニーズ、つまり子どもたちを健康にしていこうとか、自分が死んだ後も自分の一族が元気に生きていけるような社会を作ろうというような、本質的な欲望に目覚め直すことが一番のポイントなのではないかと思います。

藁谷 いい土地、いい森、いい食べ物、そういったものがいい身体を作る。いい身体を作ると、自分の中での基準や評価はそんなにずれたもの

にはなっていない。本当にそうだなあとと思います。

しかし、それが社会のシステムづくりになるとそうもいかないかもしれません。北川さんの資料によると、なんと今の人工林を環境林20万ha、生産林15万haに変えてしまおうというすごい計画があるようです。この話をちょっと聞いてみたいのですが。

北川 今までは供給側の論理で、林野庁を中心に経済林で儲けようと山を作っていたのですが、それはもうぼつぼつ卒業しようよということです。山の持つ公益的機能、これは酸素を送りだすとか水をかん養させるなど、様々な能力がありますが、その実力はあるカウントによれば75兆円という見方もあります。私たちは県単独予算ですが、経済林ではなく環境林とか生活林というイメージでゾーニングをした森林環境創造事業を13年度から始めるところです。すなわち広葉樹林を作り、間伐事業もし、今までの経済林の知恵も入れながら山を守ろう。そういうことを今この世代でやっておかないと20年後に山を守る人は誰もいなくなり、荒れはた山は今度は逆に酸素を消費するようになってしまう。そういうことを心配してつけた予算でして、これは中日新聞がトップ記事で書いてくれました。まだまだですが、将来的にはこの図のようにしていきたいと考えています。

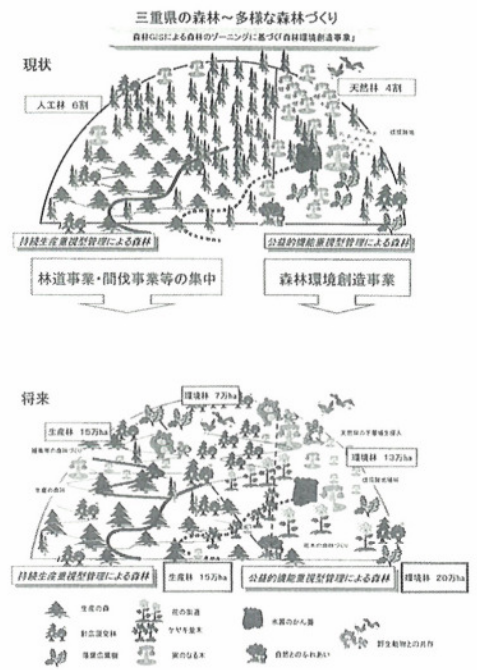
■経済林と環境林の関係づくり

藁谷 要するに、いい土地、いい森の中でこそいい自分というものも作られていくということかもしれません。今までは経済林一辺倒の林業政策で、環境林という言い方ができなかった。この環境林をうまく使うことが、赤池さんがおっしゃったことを実現できる一つのヒントになるような気がします。

赤池 産業林、環境林と分ける必要は本来なくて、経済林、産業林が環境林の機能を兼ね備えているような、そうしたやり方もできると思います。人工林の問題は日本の国産材が売れないことです。それで人が入らなくなり山が荒れてしまう。でも、きちんと日本の国産材で家を建てて儲かるという仕組みを地域で作ることができれば、当然林業の従事者や製材業者が山に入ったり、業務も兼ねて地域の子どもたちを山に入れたり、といった動きにつながるはず。その一方で、地域の経済林と良質な住宅を作るプラントなどが参画してくれば、徐々にその森の意味とか、今はまだ人材が不足している微生物の世界とかに目覚めてくる科学者たちがたくさん出てくるはず。

これは一つ警鐘ですが、今里山の保全は盛んに言われるようになってきましたが、実はその向こうにある極相化した奥山の問題については、語る科学者も市民団体も非常に少ないような気がします。極相化した奥山の地面には厳しい中で戦ってきた遺伝子の水平遺伝が起きており、この遺伝子資源が雨などによって里山や田んぼに落ちてくる。これがこの地球の生命システムを維持している大きなファクターになっているのではないかと思います。奥山につなぐ道筋がないので、それを確かめる科学者がいない。土のことをきちんと考えない。そういう悪循環が生まれています。

北川 赤池さんがおっしゃった通り、先ほどの資料を見ていただくと、体系的にプラットフォームになっています。今までは市町村や知事を評価する時、大学を誘致したとか就職率がどうか工業出荷高がどうかでカウントされていた。ものすごくきれいな水を残したとか素晴らしい環境を残したと言ってもほとんどカウント外だったわけ。そのイメージを変えていかなければいけないと思っています。森林は国民全体



21世紀の三重県の森林～多様な森林づくり～

- ◎ 基本的な考え方 ～ 新たな森林管理施策の導入 ～
 - ・ 森林は国民全体の共有財産（公共財）であると捉え、地域住民・地元市町村・県との協働による森林管理
 - ・ 木質バイオマス発電など、循環型社会に対応した森林資源の活用方法を検討
- ◎ 21世紀を見据えた三重県らしい取組
 - 森林環境創造事業（平成13年度～）
 - ・ 公益的機能重視の森林（環境林）と持続生産重視の森林（生産林）に区分
 - ・ 環境林については地域住民による計画を定め、従来の一斉に採れたスギやヒノキ（針葉樹）を、広葉樹・針葉樹の混交した力強い森林へ転換し、効果的な黒土利用
 - ・ 間伐等の森林作業の継続により、中山間地域への定住化の促進、山村の活性化
 - 国際森林認証（FSC）への取組（平成13年度～）
 - ・ 日本初の取得（H12.2、三重県海山町の湧水林業）に続く2事業体の取得への支援
 - ・ 消費者へのFSC認証材の情報提供、及びFSC認証材の利用拡大
 - 松阪木材コンビナート（ウッドピア）整備事業（平成9年度～）
 - ・ 木材の生産から加工・販売までを集中させ、紀伊半島の豊富な森林資源を活用
 - ・ ウッドピアブランドの品質管理・格付けを行い、豊富な高揃えと大量取引の実現
 - 富川流域ルネサンス事業（平成9年度～）
 - ・ 日本有数の清流である富川における、川を中心とした地域住民と地元市町村、県との協働（平成3年度～富川川対象の建設省水質調査「全国第一位」）
 - ・ 地域住民による自らの意志による環境活動（河川清掃等）
 - ・ 流域内の資源循環

の公共財ですから、地域住民、地元の市町村や県とのコラボレーションによって森林管理をしていこう。そして、そこにはバイオマスの発電、あるいは循環型社会に対応した森林資源の活用を考えていこう。こうしたベースがあれば、今赤池さんがおっしゃったように、産業林と経済林と環境林を分ける必要は全くなくなるわけです。

また、国際森林認証（FSC）への取り組みもあります。これは日本で初めて三重県の速水林業さんが取ってくれました。13年度はあと2カ所で取りたいと思っています。いわゆる複層林にして、高木と低木と中木を分けて、お互いの土壌をそこで確実に作り上げて、水をかん養できる山を作る。それを計画的に、プロセスまでクリアにしながら行っていく、そうしたシステムがFSCです。これは明らかに経済林を環境林に合わせて考えた思想です。

また、「松坂木材コンビナートウッドピア」というものもあります。三重県はヒノキヤスギの日本有数の産地で、高級材は売れるのですが、並材はほとんど売れないという問題があります。従ってその並材、あるいは間伐材を有効に使い、経済的にもバックアップをしていこうという取り組みです。

「宮川流域ルネッサンス事業」というのは、93kmある三重県で一番長い宮川での事業です。行政がブツ切りにすると川の良さが全くなくなってしまいますから、なるべく行政は立ち入らず、川上から川下まで流域全体で見ていこうという考え方です。

藁谷 なるほど、ありがとうございました。

■里山管理と市民の役割

藁谷 それではこの辺で会場からの質問を受け付けたいと思います。

質問者 三重県知事にお伺いしたい。森や林業の話はわかりやすいのですが、里山はその間にあって、政策から外れています。今まで農業と一体になっていた里山が農業から離れてしまった結果、今各地で荒れているというのが現状です。部分的には市民が関わっていますが、政策としてはポツンと外れてしまっている里山が三重県ではどのような状況になっているのでしょうか。また、狭間にある里山の政策はどのようにしているのでしょうか。何百haという規模はとても市民には関わられません。高齢化・竹林化している雑木林という里山の現状をどうしたら救えるのか、その辺のヒントを伺いたいと思います。

藁谷 これは核心をついた質問ですね。北川さん、よろしく願いいたします。

北川 三重県もご他聞にもれず、数年前に空出張問題が出まして、今職員から返金してもらっているところです。私も返しているのですが……（笑）。それを全部環境にお返ししようということで、3億円をポーンとNPOに渡してしまいました。実は、「公的な金を民間に渡すとは何ごとだ」と、ずいぶんもめたのですが。現在年間130本の、いろいろなNPOの活動を支援していて、ボランティア、NPOのみなさんが真剣に議論をしながらそれを使っています。公的なお金ですから、当然すべて情報公開です。ですから、県としては、NPOのみなさんにお任せして、里山保存、あるいはその地域の希少生物の保存に取り組んでいただいているということです。

赤池 岐阜県の梶原知事もITを利用したまちづくりという問題意識を持っていらっしゃる。どういうものかという、商店街の活性化・公園造成・河川浄化・博物館建築などの計画をどんどんインターネットを使って情報公開し、それに対するソリューションとしてどんな公園の



作り方があるべきなのか、あるいは浚渫だけではない河川浄化のやり方が様々にあるのではないか、そのような情報までも公開していこうという取り組みです。そうしたことを考える良質な自治体が徐々に増え始めているように思います。

整理しますと、エコロジカルだけでなく、エコチャーミングなプログラムというものをどう開発していくか。また、新しくものを作る段階から、市民を含めた識者たちとソリューション、オルタナティブを議論していくことが、これからの取り組みとして非常に大切だと思います。藁谷 私も一言言いたいと思います。赤池さんが基調講演で言われた、NPOが研究開発をする力をつけるべきだという意見には大賛成です。とかく技術というと企業や行政がやるものというふうに考えられていますが、これも先ほどのパラダイムチェンジでしょう。例えば、雑木林には「量」と「質」の問題がありますが、その「量」の部分を解決するのはそういう技術力なのだろうと思います。私たち自身が技術力を持つことで、例えば生分解性プラスチックができたり、エネルギーができたり、バイオマスエネルギーとして使えるというような、循環の知恵の輪が生まれてくるのではないかと思います。

■ 21世紀の社会システムとトヨタの森の役割

藁谷 もうそろそろ時間ですので、最後に一言ずつお願いいたします。トヨタ自動車及び日本環境教育フォーラム、そしてトヨタの森に対してメッセージをいただくとありがたいです。

内藤 私はトヨタ自動車に三つの側面でご協力をいただきたいと思っています。一つはハードウェア。言うまでもありませんが、トヨタさんはモノづくりのプロです。その技術を森や農林業に活かすということ。もう一つはソフトウェアの側面ですが、実はすでにログウェル日本という会社を作って、日本の国内材を流通させる仕組みをどう作り上げるかということにまで一歩踏み出されていらっしゃると思います。そういう類のソフトウェアは、もっともっとノウハウをお持ちのはずです。それをぜひ活かしていただきたいと思います。最後はハートウェア。ハート、つまり心のウェアです。私はよく言うのですが、トヨタさんも車ばかり作っているのは、いかがなものか(笑)。週に何日かでも森に入って汗を流されるとしたら、社会、あるいは社員に対しても非常によいメッセージになると思うのです。日産さんにはよく冗談で、サニーを作るんだったら週に半分はサニーレタスを作っていたらいいなあと言っているのですが、トヨタさんにはカロラ作るんだったら、キャロットでも作って下さいと言いましょか(笑)。本当にそういう活動を日本の工業界・産業界を担っていらっしゃる方にしていただき、その価値を肌身で感じていただけたら、大変意味のあることだと思います。これはお願いとも注文とも言えませんが、日頃感じていることですので、この機会にちょっと言わせていただきました。

森の中で学びながら、子どもや若い人たちがいろいろな生き方を身につける、というと、すぐ出てくるのがイギリスのC.A.T. (The Centre for Alternative Technology) という施設です。日本ではなぜそういうものができないのかとしきりに思っていたところに、トヨタの森の話が出てきた。今日本各地で新しい試みが始まっています。日本中にそのネットワークができるよう、ぜひトヨタの森にその情報発信基地となっていただきたいと思います。

赤池 司会の藁谷さんから科学技術NPOの話をしていただきましたが、基調講演でもお話ししたように、農業とか生物の素材を有効に活用する

ための機能性の研究は、長い時間と手間がかかりますので、実はあまり企業には向かないのです。ですから、そういうエキスパートを戦略的に集めたNPOにお預けて、研究活動はNPOに任せてしまう。そして、その良質な成果をきちんと事業化していく。それが良質な企業の役割だと思います。そういう組織の循環を作っていくべきです。

同じことがトヨタの森にも言えると思います。町の近郊に良質なフィールドがある。ならば、これを総合的な学習の時間にどう使えるのかを、教育に問題意識を持つNPOを組織して支援しながら、そこでできるプログラムを作っていた。それをまたNPO発で、地域の学校につないでいく。こうした取り組みが可能だと思います。学校の先生は年間70時間も総合的な学習の時間のプログラムを作って教えなければいけないのですが、みなさん素材集めには大変苦労しています。そこに企業の知恵やリソースのようなものを教えてつないであげるような仕組みづくりが、トヨタの森に限らず、日本の森や里山を守っていく一つの戦術になっていくのではないのでしょうか。

北川 事務事業評価システムという、行政体で日本で初めて三重県が入れたシステムを、一番最初に研究に来られたのがトヨタ。すごいあと本当に感心しました。トヨタは世界の大変厳しい競争の中で生きていらっしゃるから、絶えず学習する組織を作られたのだと思います。私も行政体も絶えず学習し続けながら進化できる、そういう組織体を作り上げていく必要がある。そのためには、今みなさんがおっしゃったコラボレーション、つまりすべてをオープンにして、みなさんと一緒に力を合わせて一つの共通の目的のためにがんばることが必要です。「自分たちだけ」とか縦割りの社会は、ネットワーク社会では消えてしまうと思います。私たちがまだまだ駆け出しですが、どんどん問題提起をして、そこでハレーションを起こして、そして解決していく、という努力をしていきたいと思っています。そのベンチマーキングの一番の相手がトヨタかなと思っていて、できればトヨタに負けないだけのシステムが三重県庁でできれば、と夢見ています。

藁谷 ありがとうございます。

おそらく今日出たキーワードは、21世紀の社会システムづくり、あるいは森というテーマを考えた時に貴重なものになるだろうと思います。私を含め、今日参加されたみなさんがこのキーワードを持って帰り、具体的な活動につなげていけることを期待しています。みなさん、長い時間本当にありがとうございました。

《参加者の声》

(1) シンポジウムへの参加理由

- ・トヨタの環境に対する考え方に興味があったため
- ・自社で森に関わるプログラムを始めたため
- ・行政の環境教育担当のため

(2) 基調講演について

- ・自治体の活発な活動に感心した
- ・一つひとつの事例を詳しく聞きたい
- ・科学技術NPOに非常に興味を持った

(3) ディスカッションについて

- ・三重県の施策は素晴らしい。ぜひがんばってほしい
- ・議論の視点が明確で、大変わかりやすかった
- ・人選がよかった
- ・内藤先生の話に共感した
- ・里山保全の具体例があるとなおよかったが、私たち自身が自発的に考えていこうと思った